

下高橋敷町遺跡 下高橋十ノ江遺跡

— 福岡県三井郡大刀洗町下高橋所在遺跡の調査 —

福岡県文化財調査報告書 第182集

(下巻)

2003

福岡県教育委員会

下高橋敷町遺跡 下高橋十ノ江遺跡

— 福岡県三井郡大刀洗町下高橋所在遺跡の調査 —

福岡県文化財調査報告書 第182集

(下巻)

例 言

1. 本書は、県道久留米・筑紫野線建設工事に伴って発掘調査を実施した下高橋敷町・十ノ江遺跡の報告である。
2. 発掘調査・報告書作成は、福岡県土木部道路建設課の執行委任を受けて福岡県教育庁総務部文化財保護課が実施した。
なお、調査・報告書作成に関して福岡県久留米土木事務所・大刀洗町・同教育委員会の多大なご協力を得た。
3. 出土遺物は、九州歴史資料館において、整理・復原を行った。
4. 掲載した図は、遺構は重藤輝行、森井啓次、野口未幾の他、古賀公子、古賀千都子、仲村亮一の協力を得て、遺物は重藤・岡寺（旧姓野口）が実測した。製図は、豊福弥生、原カヨ子、江上佳子が行った。なお出土土器の内、須恵器は断面を塗りつぶし、土師器との判別を容易にした。
5. 掲載した写真は、遺構を重藤・森井・野口が、遺物は九州歴史資料館において同館参事石丸洋氏の指導の下、文化財保護課北岡伸一氏が撮影したものを使用した。
6. 本書掲載の遺構実測図の座標は国土調査法第II座標系に基づいたものであり、使用した方位はすべて座標北(G.N.)である。
7. 土層注記の内、土色の記号があるものは、『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社1999年）に基づき行った。
8. 本書の執筆は下高橋敷町遺跡II区については重藤が、他は岡寺が行った。編集は重藤の協力を得て岡寺が行った。

本文目次

	本文頁
I. はじめに	1
II. 位置と環境	3
III. 下高橋敷町遺跡	7
1. I区の調査	7
2. II区の調査	15
IV. 下高橋十ノ江遺跡	18
V. おわりに	22

図版目次

図版1	1 下高橋敷町遺跡 I区全景空中写真 (西から)
	2 下高橋敷町遺跡 I区全景空中写真 (南から)
図版2	1 土坑1 2 土坑2 3 土坑3
図版3	土坑出土の土器
図版4	土器5内部出土の粘土塊 トレンチ・検出面出土の土器 製塩土器 軽石
図版5	1 下高橋十ノ江遺跡調査区北半 (南から)
	2 下高橋十ノ江遺跡調査区南半 (北から)
図版6	下高橋十ノ江遺跡出土の土器・陶磁器

挿図目次

第1図	下高橋敷町・十ノ江遺跡位置図	3
第2図	遺跡の位置と周辺の遺跡 (1/25,000)	4
第3図	調査地位置図 (1/5,000)	6
第4図	下高橋敷町遺跡周辺地形図 (1/1,000)	7
第5図	下高橋敷町遺跡遺構配置図 (1/300)	8
第6図	基本層序 (1/60)	10
第7図	土坑実測図 (1/30)	10
第8図	土坑出土土器実測図 (1) (1/3)	12
第9図	溝1・2・3土層図 (1/40)	13
第10図	土坑出土土器 (2) ・その他の出土遺物実測図 (1/3)	14
第11図	II区包含層出土土器実測図(1/3)	17
第12図	下高橋十ノ江遺跡周辺地形図 (1/1,000)	18
第13図	下高橋十ノ江遺跡遺構配置図 (1/400)	19
第14図	下高橋十ノ江遺跡土層図 (1/40)	20
第15図	下高橋十ノ江遺跡出土遺物実測図 (1/3)	21

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

この遺跡を発掘調査する事となった契機は、県道久留米筑紫野線の道路改良工事である。県道久留米筑紫野線は、久留米市より筑紫野市へ至り、交通量の多い福岡と久留米を結ぶバイパス的役割を果たす重要な道路である。この路線に関するこれまでの埋蔵文化財調査では、旧石器時代の筑紫野市宗原遺跡、弥生時代の夜須町七板遺跡、夜須町と小郡市に跨る乙隈天道町遺跡などの重要な遺跡が発見されているが、中でも当遺跡と地理的に近く、重要な遺跡は大刀洗町下高橋馬屋元遺跡である。この遺跡は、下高橋上野遺跡とともに古代御原郡衙の郡庁院・正倉院が良好に遺存し、県道敷を含めた9.8haが国指定史跡となっている。

大刀洗町下高橋の区間は、平成14年度に道路改良工事の着工予定となり、平成12年度に福岡県久留米土木事務所より、県教育庁北筑後教育事務所に対して、当該路線内の埋蔵文化財の有無についての協議が開始された。これをうけて平成13年3月22・23日に福岡県教育庁総務部文化財保護課主任技師森井啓次が、大刀洗町の県道久留米筑紫野線建設予定区間内の試掘調査を行った。全部で六地点の試掘調査を行い、この結果、下高橋敷町遺跡と下高橋十ノ江遺跡の二地点で遺跡の存在が確認され、発掘調査をする運びとなった。

下高橋敷町遺跡は、三井郡大刀洗町大字下高橋1265-1、1264-1に所在する。調査は2次にわたって行われ、西側の1265-1番地をⅠ区とし、東側の1264-1番地をⅡ区とする。Ⅰ区の調査面積は500㎡で、Ⅱ区の調査面積は180㎡である。Ⅰ区の調査は、平成13年5月8日から7月13日まで福岡県教育庁総務部文化財保護課主任技師森井啓次および同技師野口未幾が行った。Ⅱ区は平成13年9月5日から11日まで、福岡県教育庁北筑後教育事務所文化班主任重藤輝行および森井がおこなった。

下高橋十ノ江遺跡は、三井郡大刀洗町大字下高橋734・735番地に位置する。調査面積は1280㎡で、南北に二分し、反転して調査を行った。調査は野口が、平成13年5月8日から平成13年7月13日にかけて下高橋敷町遺跡Ⅰ区の調査と合わせて行った。

2. 調査の組織

本報告書作成にかかる平成13・14年度福岡県教育委員会の関係者は以下のとおりである。

	平成13年度	平成14年度
福岡県教育委員会		
総括		
教育長	光安常喜	森山良一
総務部長	三瓶寧夫	松本通憲
文化財保護課長	井上裕弘	井上裕弘
同参事	橋口達也	橋口達也
	平野義峰 (兼課長補佐)	久芳昭文 (兼課長補佐)
同参事補佐	佐々木隆彦 (調査第一係長)	佐々木隆彦 (調査第一係長)

庶務

文化財保護課管理係長
同主任主事

三笠ひとみ
鎮守俊明
秦 俊二

古賀敏生
鎮守俊明
秦 俊二

調査・報告書作成

技術主査
主任技師

飛野博文 (調査第二係)
重藤輝行 (北筑後教育事務所)
森井啓次 (調査第一係)

飛野博文 (調査第一係)
重藤輝行 (北筑後教育事務所)
森井啓次 (京築教育事務所)
岡寺未幾 (調査第一係)

技 師
整理担当
主任技師

野口未幾 (調査第一係)

岸本 圭 (調査第一係)
今井涼子 (調査第二係)

表土剥ぎおよび埋戻し作業は (有) 坂田技研に依頼した。なお発掘調査にあたっては、久留米土木事務所、大刀洗町および大刀洗町教育委員会、福岡県教育庁北筑後教育事務所、そして作業員の皆様および調査地近隣の方々の多大な御協力をいただいた。

調査期間中には、赤川正秀氏、西村智道氏 (大刀洗町教育委員会)、本田岳秋氏、高田知恵氏 (北野町教育委員会) には発掘現場において指導・助言をいただいた。

また、報告書作成にあたっては、文化財保護課太宰府事務所の方々にご協力いただいた。記して感謝の意を表します。



調査風景 (1)



調査風景 (2)

II. 位置と環境

大刀洗町は、福岡県の中央やや西よりに位置する。北側は朝倉山塊の末端部ともいえる花立山（城山）を中心とした比較的なだらかな台地部であり、南部は筑後平野の北端部である平野部からなる。

かつては台地の縁辺部の遺跡が目ざされることが多かったが、弥生時代の大集落である北野町彼坪遺跡等の発掘調査から、平野部にも大規模な遺跡が展開することが明らかになった。当遺跡も大刀洗川の南岸の低位段丘上に位置している。

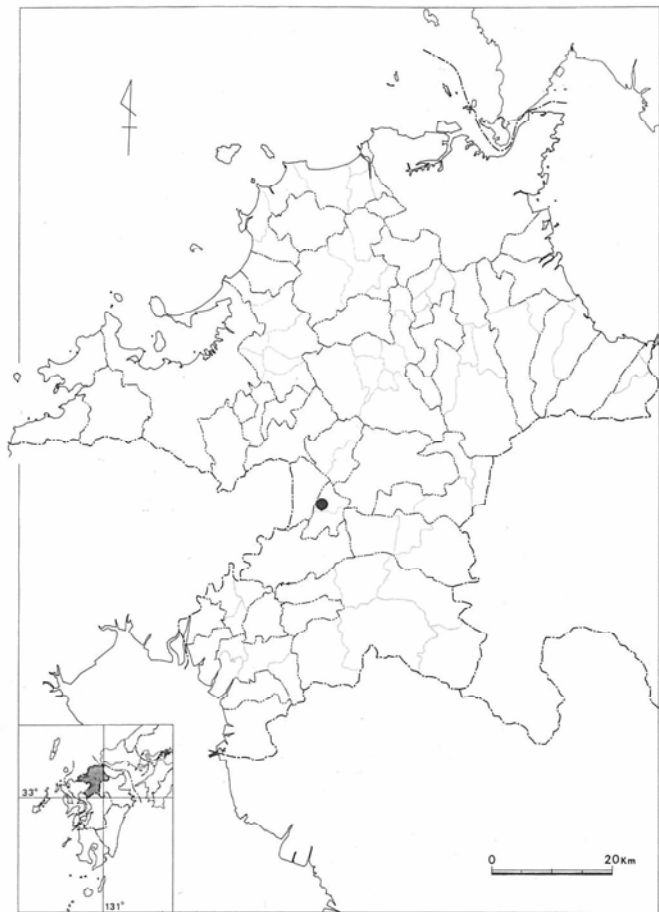
本書では、下高橋敷町・十ノ江遺跡周辺の遺跡を中心にみていくことにする。

旧石器時代は、北側台地部に位置する本郷野開遺跡、下高橋馬屋元遺跡で細石刃が確認されている。

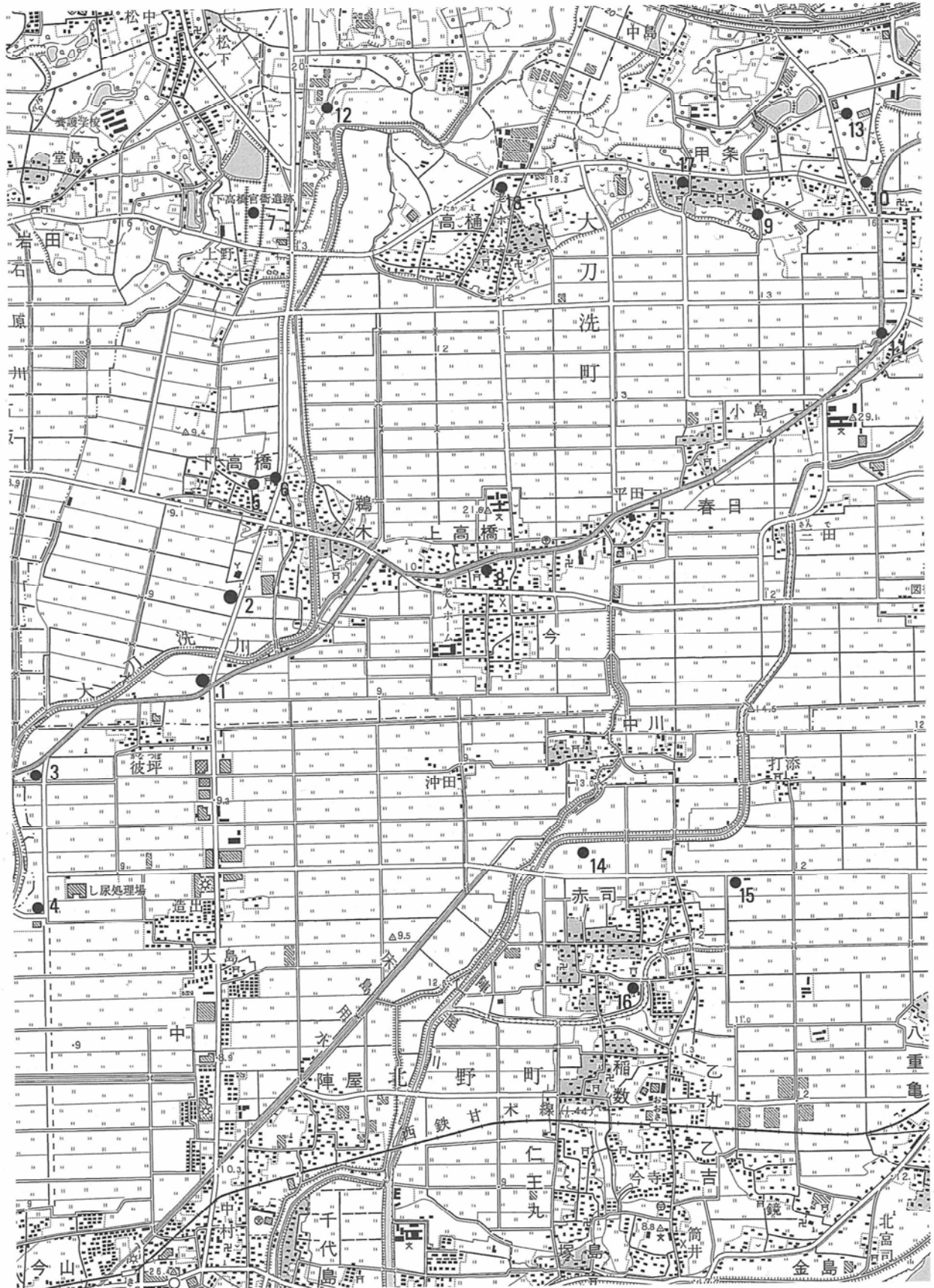
縄文時代は、下高橋上野遺跡・下高橋馬屋元遺跡・本郷野開遺跡など台地上に落とし穴状遺構が多数確認されていることから、同台地が狩猟の場であったことが推測される。

弥生時代は先にも述べた彼坪遺跡や北大手木遺跡が、低地に立地する弥生時代の集落遺跡として知られている。また他の平野部の遺構としては、弥生時代後期から古墳時代前期まで環濠集落・墓地在営まれ隆盛を誇る良積遺跡がある。赤司城小路遺跡は周辺の遺跡と合わせて良積遺跡の衛星集落と考えられている。餅田遺跡は弥生時代中期前半から後期初頭の甕棺墓地である。鶴木横道遺跡は弥生時代後期から古墳時代初頭の墓地在確認されている。台地側の弥生時代の集落遺跡としては前期・中期後半の下高橋馬屋元遺跡、後期前半の本郷野開遺跡、後期後半から終末の本郷畑築地遺跡、後期前半の甲条北松木遺跡が存在する。また、墓地在は下高橋馬屋元遺跡の土器棺墓からはじまり、中期前半から終末までの甲条神社遺跡、中期後半から終末までの甲条北松木遺跡、中期前半の高樋塚添遺跡、中期から後期にかけての本郷畑築地遺跡などが存在する。

古墳時代の遺構は台地側では、甲条北松木遺跡で方形周溝墓がある。本郷鶯塚1号墳は長靴形の横口式石室を持つ事で知られるが、平成14年度行われた大刀洗町教育委員会の調査により、鶯塚3号墳も同様な石室を持つことが確認された。本郷野開遺跡では円筒埴輪が出土している。また大刀洗飛行場の開発で破壊された古墳が多数あると伝えられている。台地部を広くみると、城山西麓の小郡市には花立山古墳群が、東南麓には夜須町に小隈窯跡、三輪町に山隈窯跡という初期須



第1図 下高橋敷町・十ノ江遺跡位置図



1. 下高橋敷町遺跡 2. 下高橋十ノ江遺跡 3. 彼坪遺跡 4. 北大手木遺跡 5. 高橋城跡宝篋印塔 6. 高橋城跡 7. 下高橋馬屋元遺跡・上野遺跡 8. 上高橋城跡 9. 甲条北松木遺跡 10. 本郷鶯塚1号墳 11. 本郷流川遺跡 12. 鶯木横道遺跡 13. 本郷野開遺跡 14. 良積遺跡 15. 餅田遺跡 16. 赤司城小路遺跡 17. 甲条神社遺跡 18. 高樋塚添遺跡

第2図 遺跡の位置と周辺の遺跡 (1/25,000)

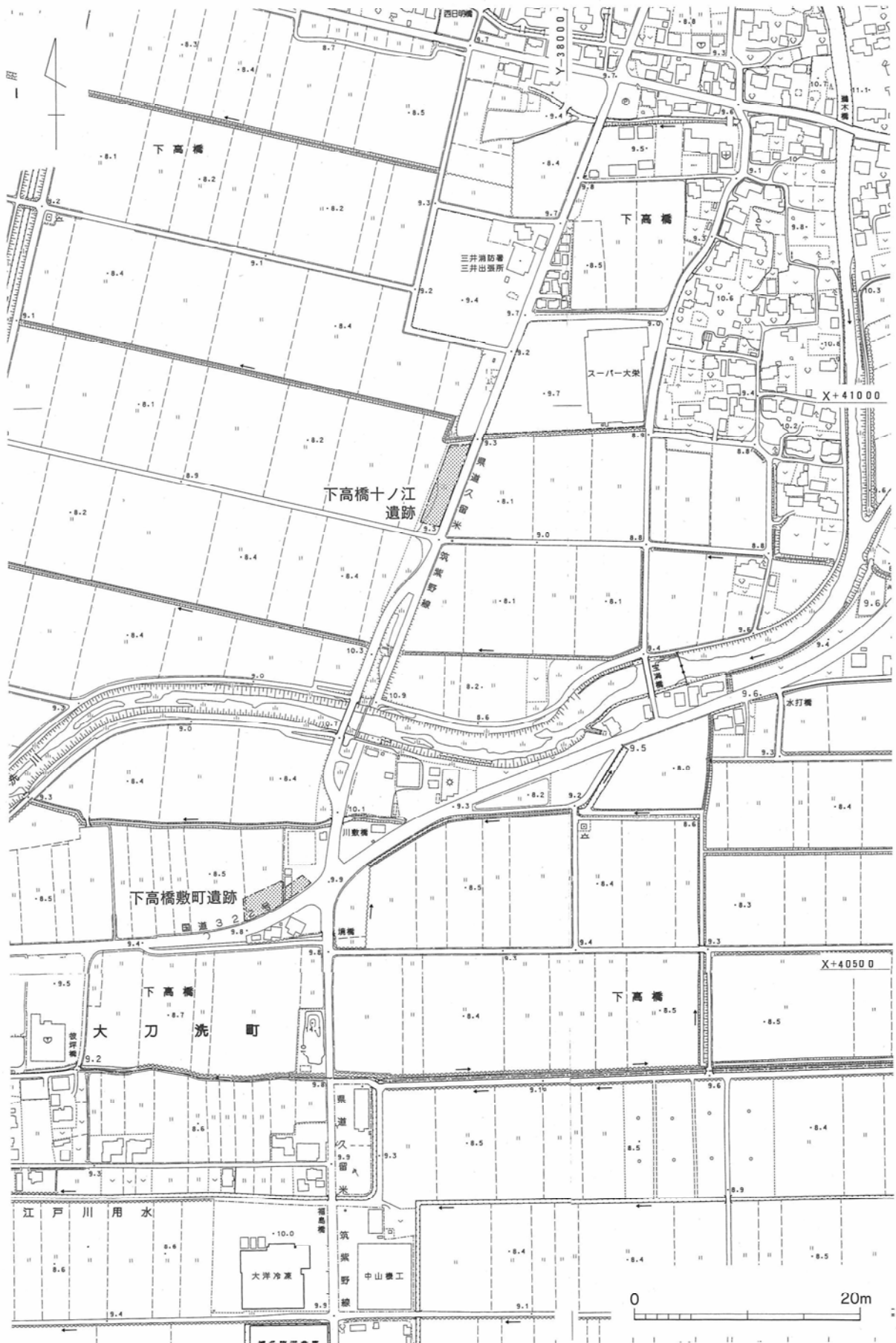
恵器の窯跡が存在することから、古墳時代におけるこの地域の重要性が窺われる。また、平野部において古墳時代の遺跡の調査例は多くないが、本郷流川遺跡で古墳時代初頭・後期の住居跡および後期の自然流路が確認され、多数の木製品が出土するなど、最近の調査成果はめざましい。下高橋敷町遺跡付近ではこれまで古墳時代の遺跡は見つかっていなかったが、当遺跡の存在は付近にも集落が展開する可能性を示唆する。

古代には筑後国御原郡衙と推定される下高橋官衙遺跡が存在する。下高橋上野遺跡は正倉院、下高橋馬屋元遺跡は郡庁院と考えられており、古代郡衙の構造を知る上で全国的にみても非常に重要な遺跡である。また本郷野開遺跡でも奈良時代の集落が見つかっている。

中世の遺跡としては遺跡北側に位置する高橋城跡および高橋城跡宝篋印塔、遺跡東に位置する上高橋城跡が存在する。高橋城跡は大刀洗町教育委員会によって調査が行われ、中世後期の遺構が見つかっている。詳細については今年度刊行の大刀洗町文化財調査報告書第23集を参照されたい。

<参考文献>

- 児玉真一編 1993「本郷畑築地遺跡」大刀洗町文化財調査報告書第2集
赤川正秀 1993「下高橋上野遺跡」大刀洗町文化財調査報告書第5集
赤川正秀 1994「本郷鷲塚1号墳」大刀洗町文化財調査報告書第6集
赤川正秀編 1995「甲条神社遺跡」大刀洗町文化財調査報告書第7集
赤川正秀 1996「下高橋上野遺跡Ⅱ」大刀洗町文化財調査報告書第10集
赤川正秀編 1996「甲条北松木遺跡」大刀洗町文化財調査報告書第11集
赤川正秀編 1997「高樋塚添遺跡Ⅰ」大刀洗町文化財調査報告書第12集
赤川正秀 1997「本郷野開遺跡Ⅱ」大刀洗町文化財調査報告書第13集
赤川正秀 1997「下高橋遺跡Ⅲ」大刀洗町文化財調査報告書第14集
赤川正秀 1998「本郷野開遺跡Ⅲ・Ⅳ」大刀洗町文化財調査報告書第15集
赤川正秀 1999「下高橋（上野・馬屋元）遺跡Ⅳ」大刀洗町文化財調査報告書第16集
赤川正秀編 2000「甲条神社遺跡Ⅱ」大刀洗町文化財調査報告書第20集
赤司善彦編 1997「下高橋馬屋元遺跡（1）」福岡県文化財調査報告書第129集
赤司善彦編 1998「下高橋馬屋元遺跡（2）」福岡県文化財調査報告書第133集
重藤輝行 2001「本郷流川遺跡」福岡県文化財調査報告書第165集
飛野博文・本田岳秋 2000「北大手木遺跡」福岡県文化財調査報告書第151集
飛野博文 2002「彼坪遺跡Ⅰ」福岡県文化財調査報告書第167集
堀田秀茂 1993「良積遺跡Ⅰ」北野町文化財調査報告書第5集
本田岳秋 1998「良積遺跡Ⅱ」北野町文化財調査報告書第11集
本田岳秋 1999「良積遺跡Ⅲ」北野町文化財調査報告書第12集
水ノ江和同・池邊元明 1993「定格・餅田遺跡」北野町文化財調査報告書第1集



第3図 調査地位置図 (1/5,000)

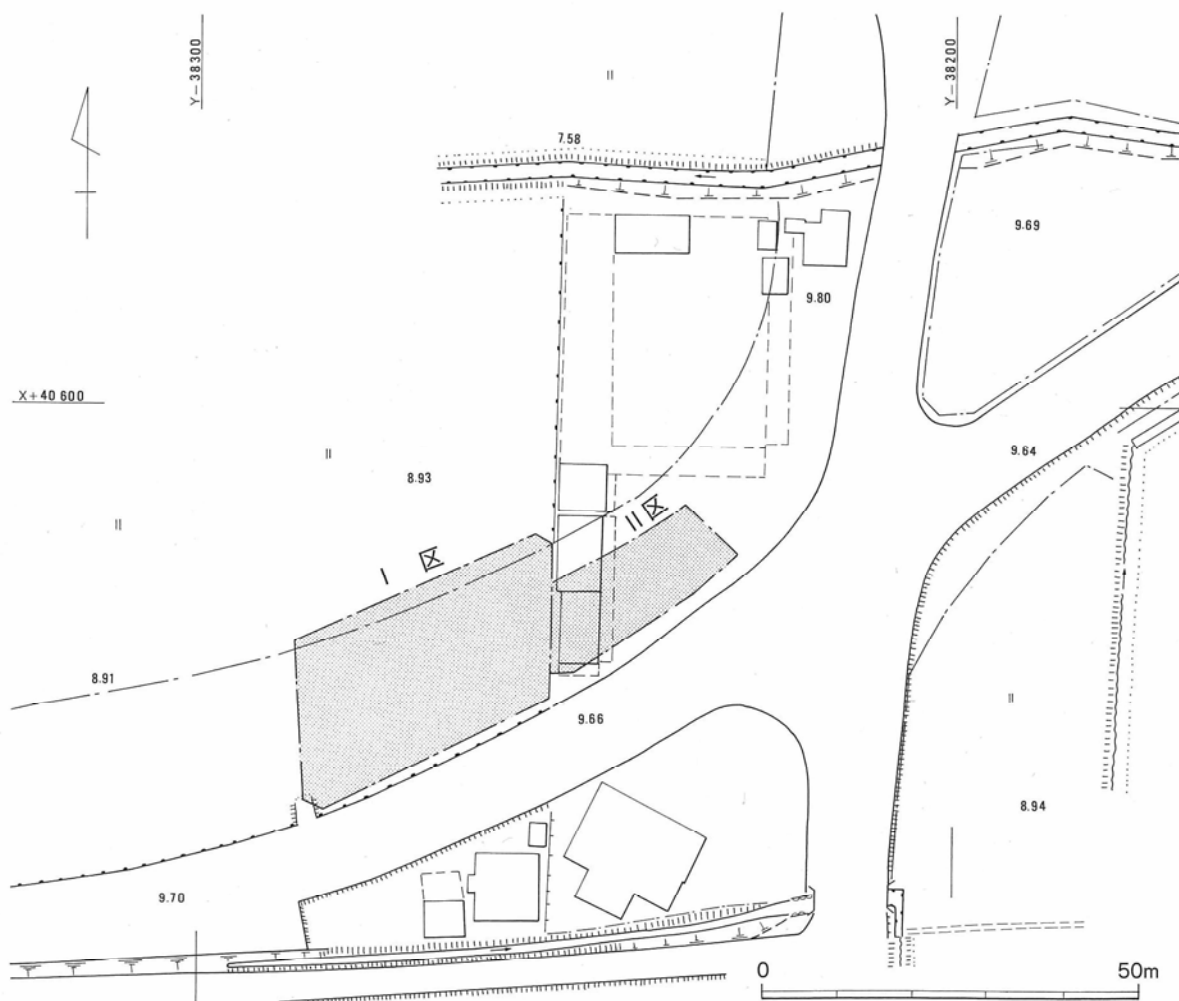
Ⅲ. 下高橋敷町遺跡

1. I 区の調査

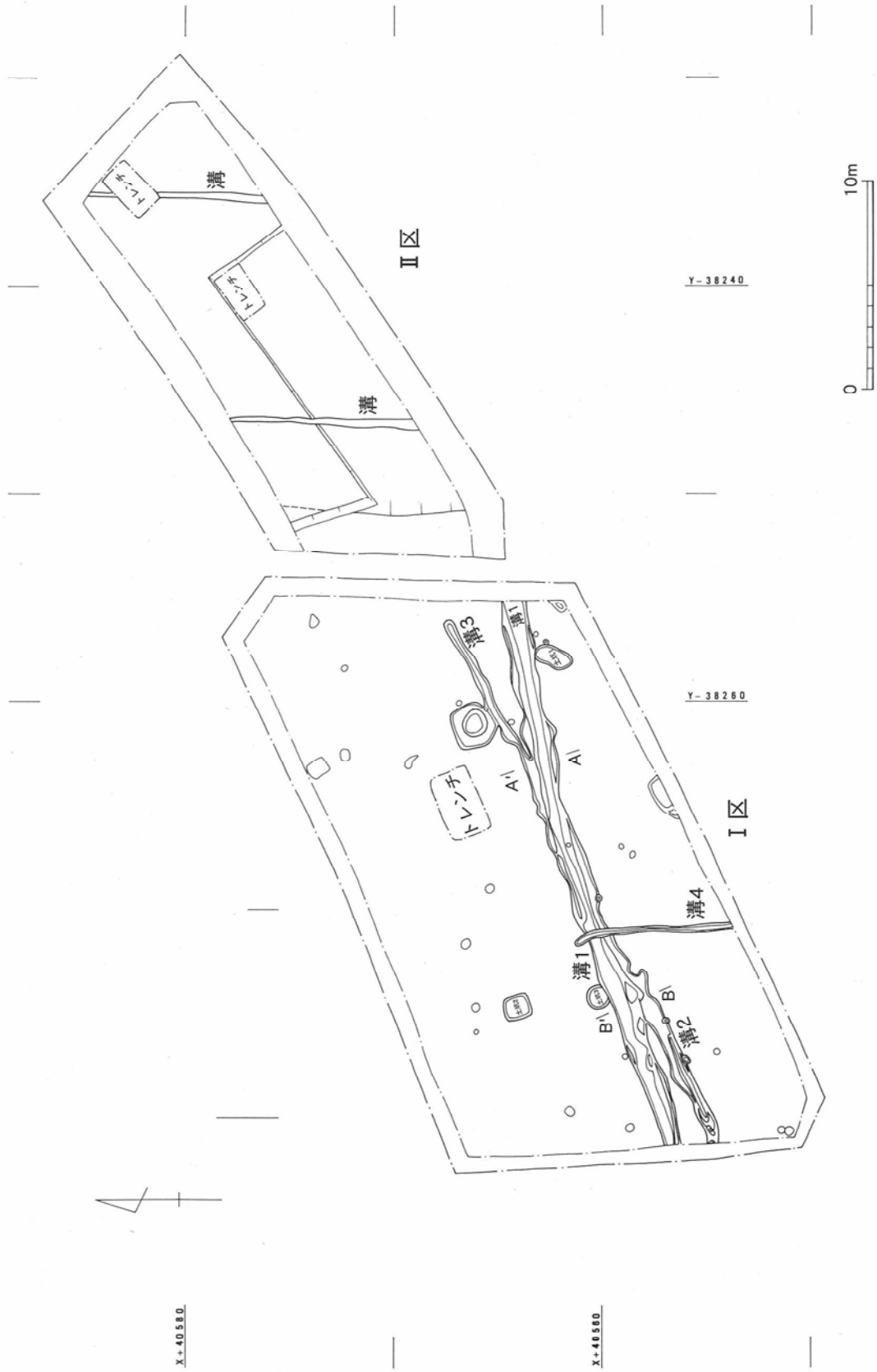
敷町遺跡 I 区は三井郡大刀洗町大字下高橋1265-1に所在する。1246-1番地に所在する II 区の西側にあたる。調査区は幅17m、長さ34mを測り、調査面積は約500㎡である。調査地の標高は8.00mを測り、調査区内はわずかではあるが南から北に向かって低くなる。

試掘調査では地表より約50cm下、基本層序の第3層（第6図）で、古代の遺物が確認された。しかし本調査開始後、重機による表土剥ぎを行ったところ、明確な遺構が認められなかった。その為さらに30cmほど掘り下げたところ、II 区の第4層に対応する面で、土坑が検出されたため、この面を遺構面として検出した。遺構面は黄褐色で粘性が強く、乾燥すると非常に硬い土質である。褐色の細粒が入り、鉄分を多く包含している。

当調査区で検出された遺構は、土坑3基と、溝4条、およびピット多数である。



第4図 下高橋敷町遺跡周辺地形図 (1/1,000)



第5図 下高橋敷町遺跡遺構配置図 (1/300)

1) 土坑

土坑1 (図版2、第7図1)

調査区東に位置し、長軸1.88m、短軸1.05mを測る。プランは不整楕円形を呈する。検出面からの深さは8cmと浅く、残りは悪い。土坑内には土器片が散在する状況で出土した。図化できる個体は2点であるが、本来はさらに数個体存在したものと考えられる。

出土遺物 (図版3、第8図1～2)

土師器

甕(1・2) 1は口縁から胴部上半まで残る。調整は外面は摩滅が激しいが、タテハケ後ナデ。内面は工具によるナデ。灰褐色を呈し、焼成はやや良。胎土はやや粗、石英・長石を含む。2は丸底の底部。赤褐色を呈し、焼成はやや不良。調整はナデであるが外面の一部にハケ目残る。胎土は石英・角閃石・長石を含みやや粗。

土坑2 (図版2、第7図2)

調査区西やや北よりに位置する。長軸1.3m、短軸1.18mを測り、プランはほぼ方形を呈する。検出面からの深さは1.6cmで、床面は非常に平坦である。

出土遺物 (図版3・4、第8図3～6)

土師器

壺(3) 完形の直口壺。頸部はしまり、胴は丸みのある算盤玉の形状を示す。器壁は厚い。にぶい明褐色を呈し、胎土はやや密、金雲母・石英・長石・赤色土粒を含む。焼成良好。

甕(4・5・6) 4は全体の4分の3が残る。口縁は外反し、頸部はきつくしまる。タタキ成形のため、頸部が一番厚い。外面はタテハケ後、板状工具によるナデ。内面は板状工具によるナデ。外面に一部黒斑有り。赤褐色から灰褐色を呈する。焼成良好。胎土はやや粗。石英・長石・角閃石赤色土粒を含む。内面に鉄分が付着。5は口縁が外反する長胴の甕。丸底。外面はタテハケ後ケズリ、内面は工具によるナデの後ケズリ。全体の90%が残り、先の2点と比べて粗雑な作りである。色調は暗灰褐色～にぶい黄褐色を呈する。焼成はやや不良で黒斑有り。胎土は粗で長石・石英・シャモットを含む。6は口縁。外反し、口縁はやや厚い。摩滅が激しく、内外面ともヨコナデか。にぶい褐色を呈し、焼成はやや良。胎土はやや密で長石の大粒を含む。

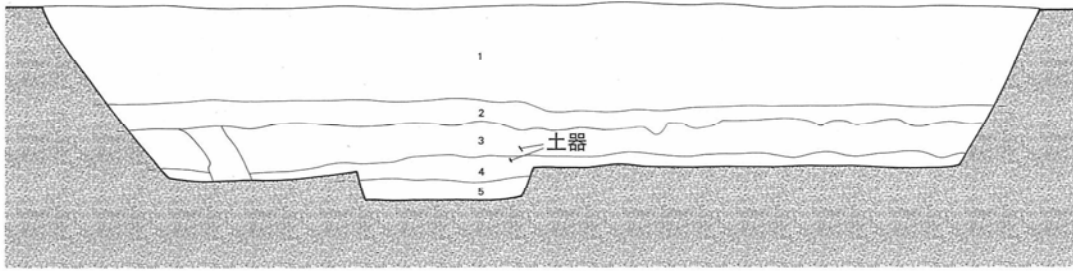
粘土塊 (図版4)

土器5を水洗した際に見つかった粘土塊である。形状は楕円の板状で、長軸15cm、短軸14cm、厚さ2.2cmを測る。被熱は受けてないが、固く安定した形状をしているため、何らかの製品である可能性も考えて、写真を報告する。なお、土坑が埋没した後に甕内に泥が堆積して、自然に硬化したものの可能性も考えられる。

土坑3 (図版2、第7図3)

調査区西に位置する。南側を溝1に切られ不整楕円形を呈するが、元来は円形であったと思われる。長軸1.08m、短軸0.83mを測り、検出面からの深さは16cmである。土坑底面より10cm程上層で、土師器の甕と壺が所狭しと集中した状態で出土した。

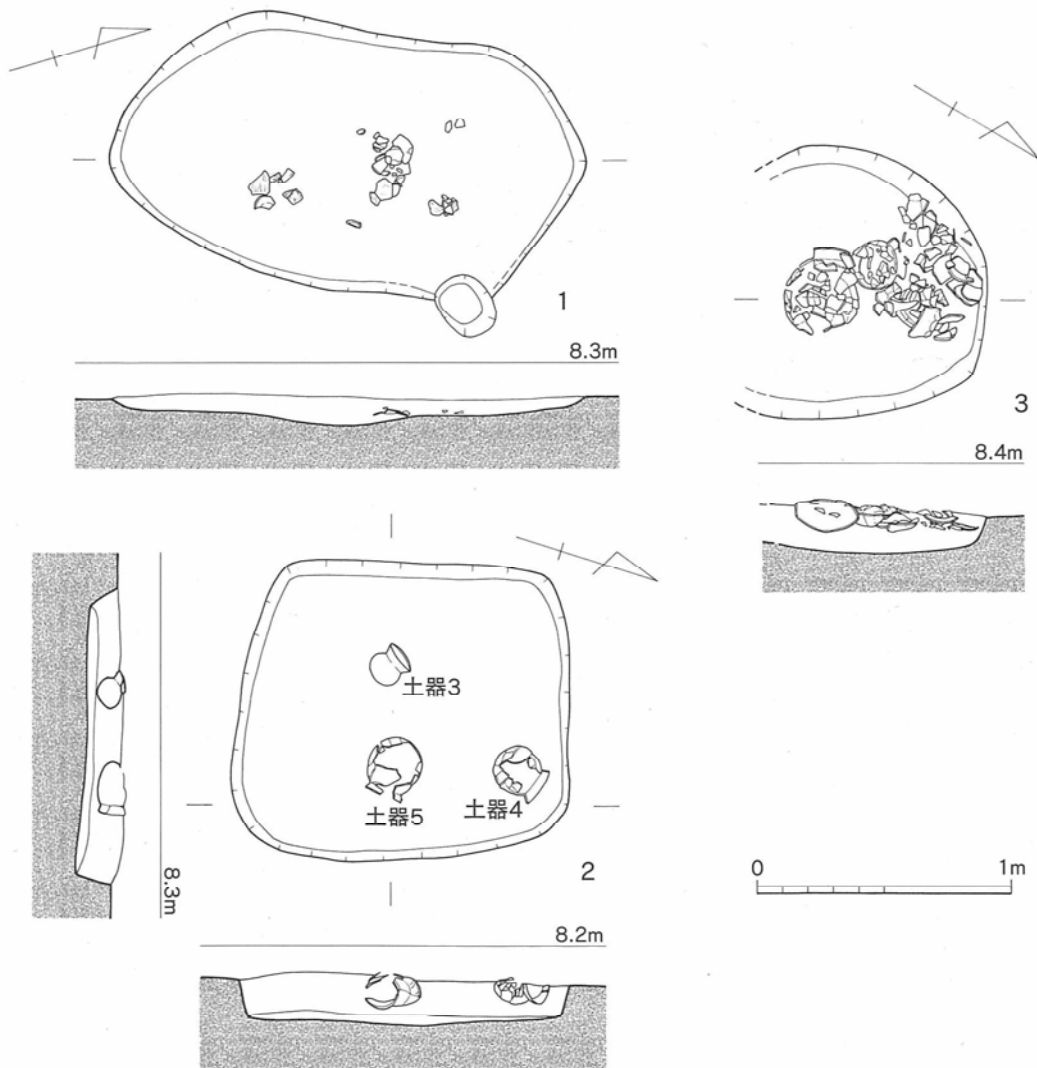
10.0m



土層番号	土色		備考
1		礫層	客土
2	暗黒灰色	シルト	水田の土か？
3	暗灰緑色	シルト	奈良～中世の土器片を含む包含層
4	灰褐色	シルト	奈良～中世の土器片(ローリングを受ける)を含む包含層
5	灰色	シルト	



第6図 基本層序 (1/60)



第7図 土坑実測図 (1/30)

出土遺物（図版3・4、第8・10図7～10）

土師器

壺（7）広口壺。底部を欠く。口縁から頸部までは短く、やや直に立ち上がる。胴部は球状に張る。全体に摩滅が激しいが、調整は口縁部ヨコナデ、外面タテハケ後工具によるヨコナデ。また、胴部には、強いヨコ方向の指ナデが施されている。内面はケズリ。色調は外面黄褐色、内面黒褐色で、一部黒斑有り。石英・長石・雲母を含む。

甕（8～10）8は口縁部および底～胴部を合成復元。口縁は外反し、胴部は整った球状。外面・口縁部付近はヨコナデ、内面はケズリ、器壁は薄く、丁寧な作りである。色調は外面にぶい黄褐色、内面灰褐色。焼成やや不良、胴部下半に黒斑有り。胎土はやや密で長石・金雲母を含む。9は口縁部上半を欠く。頸部はしまる、長胴で丸底。厚ぼったい印象を受ける。色調は褐色～暗褐色。焼成はやや良好。調整は非常に粗雑で、外面はタテおよびナメハケ。内面は板状工具によるナデ胴下半は指オサエ・指ナデ。粘土帯の接合部を強く指ナデする。底部は被熱により赤化。胎土はやや粗、石英・長石・雲母を含む。10は口縁から肩部。調整は内外面ともナデ、口縁端を平坦に整える。にぶい褐色、焼成やや良。胎土は金雲母・長石・石英を含みやや粗。

2) 溝

溝から出土した遺物は細片が多く時期を特定するのは困難であるが、古代の遺物を含んでおり、時期は明確ではない。切り合い関係から、溝1→溝2・3→溝4の順に構築されたと考えられる（第9図）。遺構規模は、長さについては検出できた長さを、幅及び深さについては平均値をとる。

溝1（図版1、第5・9図）

調査区内を東西に走る溝で、溝2・3・4に切られる。遺構の規模は、長さ27.1m、幅1.5m、検出面からの深さは24.4cmである。

出土遺物（図版4、第10図15）

軽石 面取りして長方形に整形する。色調は明灰褐色で、重さ138g。

溝2（図版1、第5・9図）

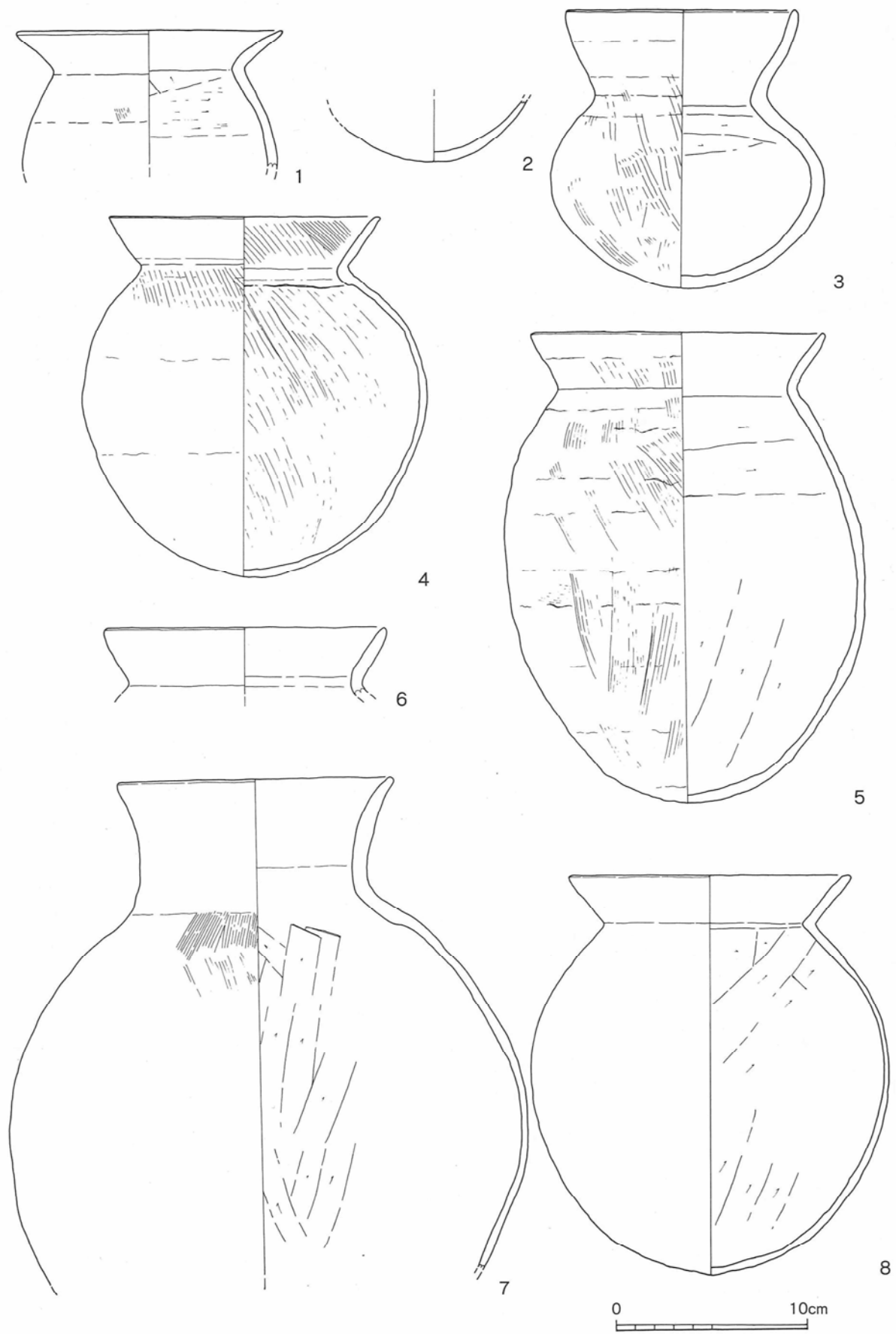
調査区西側に位置し、東西方向に走り、溝1を切る。長さ8.8m、幅約0.83m、深さ9.5cm。遺物は出土していない。

溝3（図版1、第5・9図）

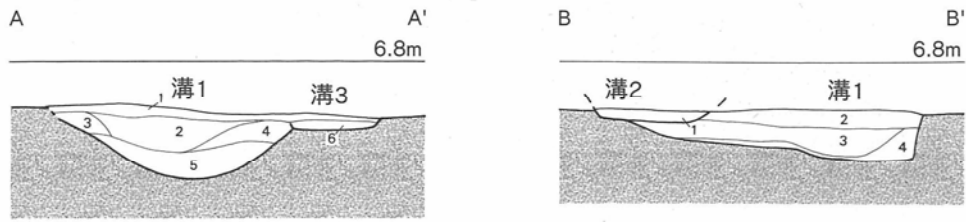
調査区東側に位置し、東西方向に走り、溝1を切る。長さ9.0m、幅約0.4m、深さ5.2cm。遺物は出土していない。

溝4（図版1、第5図）

調査区中央西に位置し、南北に走り、溝1を切る。長さ7.7m、幅0.30m、検出面からの深さは6.8cm。図化できる出土遺物はない。



第8图 土坑出土土器实测图 (1) (1/3)



土層番号	土色	粘性	しまり	備考
1	10YR3/1 黒褐色	○	○	褐色土粒(鉄分)(30%)を含む
2	10YR3/1 黒褐色	○	○	微量の炭、褐色土粒(鉄分)(30%)を含む
3	10YR3/1 黒褐色	○	○	褐色土粒(鉄分)(30%)を含む
4	10YR3/2 黒褐色	○	○	褐色土粒(鉄分)(30%)、ロームブロックを含む
5	10YR3/1 黒褐色	○	○	褐色土粒(鉄分)(30%)を含む
6	10YR3/2 黒褐色	○	△	褐色土粒(鉄分)(30%)砂(30%)を含む

第9図 溝1・2・3土層図 (1/40)

3) その他の遺物

弥生土器 (図版4、第10図11)

トレンチより出土。甕、丸みのあ
るくの字状口縁である。黄灰褐色を
呈し、焼成良好。胎土はやや粗で長
石・石英・赤色土粒を含む。弥生時
代中期末頃。

土師器 (図版4、第10図12・13)

共に排土より出土。12は椀。外面
は赤褐色、内面黒褐色でいわゆる黒
色土器A類に属する。全体に摩滅。胎
土は微量のシャモットを多く含み、

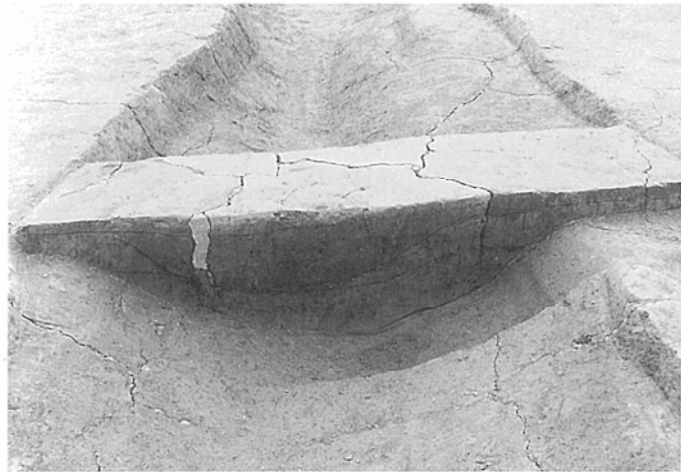
やや密。10世紀頃か。13は皿。赤褐色、内外面とも回転ナデ。焼成良好。胎土はやや密で雲母・石英・長石を含む。底部に糸切り痕。12世紀末から13世紀初頭か。

製塩土器 (図版4、第10図14)

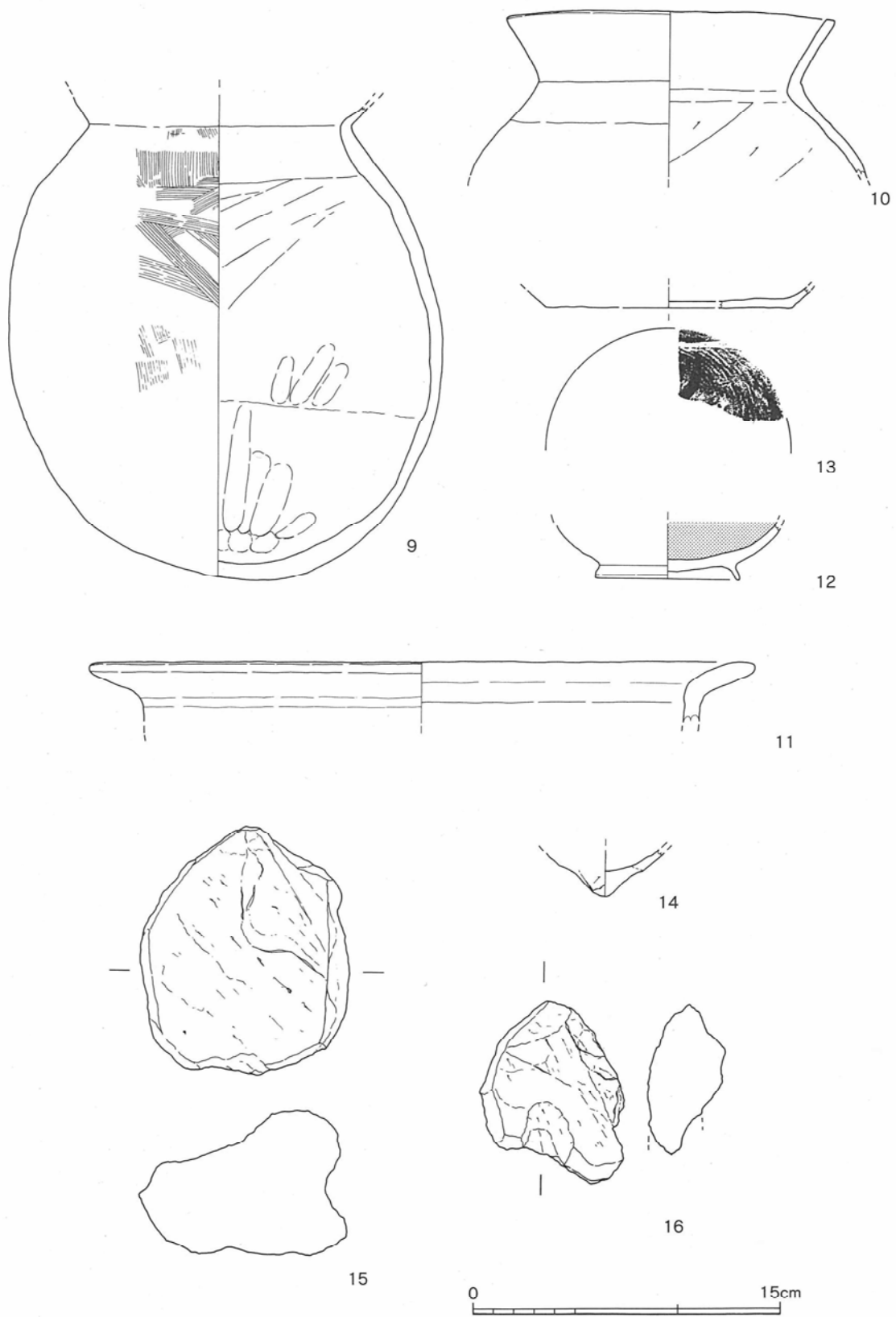
排土より出土。底部のみ残る。先端が尖るタイプ。色調はにぶい褐色を呈し、焼成良好。調整は内面が粗い指ナデ、外面が粗いナデを施す。胎土はやや粗で、石英・長石・金雲母を含む。

軽石 (図版4、第10図16)

検出面より出土。整形後、敲打により凹みを作ったもの。半分を欠く。明灰褐色、重さ29g。



溝1土層断面写真 (東から)



第10図 土坑出土土器(2)・その他の出土遺物実測図(1/3)

2. II区の調査

下高橋敷町遺跡II区はI区の東に隣接し、「彼坪」交差点北西に位置している。本地点は店舗の前面であったため、試掘調査により遺構の有無を確認していたわけではないが、I区に隣接し連続する遺構の存在が予測されたことから、本調査を実施することとした。交差点北西に位置する店舗の一部解体移転、アスファルト舗装の撤去が完了するのをまって、平成13年9月5日に調査に着手し、同年9月11日までの期間に調査を実施した。

II区は交差点と店舗に挟まれた場所であり、調査区壁の土砂崩落を防ぐとともに、通行する歩行者、自動車等の安全にも十分な配慮を払う必要があった。そこで、工事予定地のうち歩道部分を調査対象から除外するとともに、調査区壁も十分な勾配を設定した。その結果、調査区は用地範囲よりもかなり狭くなり、調査区肩で長さ27m、幅10m、遺構面で長さ25m、幅7mのほぼ長方形を呈している。

調査では重機で客土、暗黒灰色シルト土（水田耕作土か）、暗灰緑色シルト土（水田床土か）を除去した地表下1.2～1.4m程、標高8.3m前後で現れる灰褐色シルト土を主体とする包含層を主たる調査対象とした（第6図土層図）。この灰褐色シルト土は調査区の西1/4を除くほぼ全面に分布していたが、調査では包含層の南中央部を15×4mの範囲で掘り下げて、遺物を回収し時期、形成要因を推測するとともに、包含層の下層の遺構の有無を確認していくこととした。なお、調査区中央部、調査区東部をほぼ南北方向に2条の溝が走っているが、竹を暗渠状に埋設した溝であり近世以降と推測されることから調査対象から除外した。

灰褐色シルト土を掘り下げたところ奈良時代～中世の土器が出土した。ただ、これらはいずれもやや摩滅を被った小片であり、散漫に出土することから包含層に掘り込んだ遺構の存在もうかがわれなかった。また、灰褐色シルト土直下では灰色シルト土が堆積しているが、その上面が西から東に緩やかに低くなっていくので、傾斜地に灰褐色シルト土が堆積したと判断される。灰色シルト土の上面では、特に遺構は検出されなかった。

また、灰色シルト土よりさらに下



II区調査終了後全景



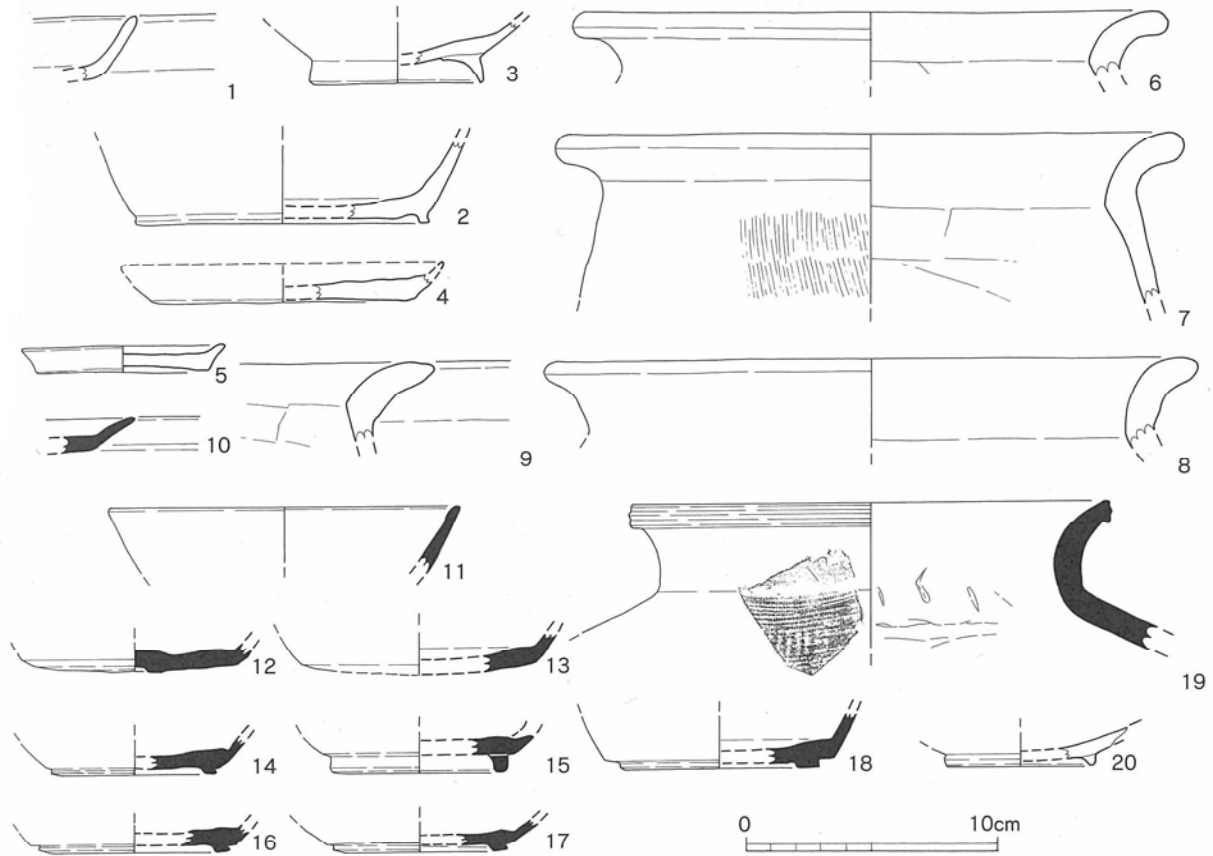
II区東壁土層

層の遺構ないしは包含層の有無を確認するために調査区東寄りに長さ2.5m、幅1.4mのトレンチを2ヶ所に設定して掘り下げた。トレンチでは灰色シルトの下、地表下1.9m、標高7.7m程で有機物を含んだ暗灰褐色シルト土が検出された。この暗灰褐色シルト土は有機物を含むことから沼地等の条件で堆積したと思われる、遺構の存在する可能性は低いと判断された。そこで、包含層の掘削も一部にとどめ、調査を終了することとした。

なお、包含層はさらに北へと広がることは確実であるが、包含層の遺物も少なく、店舗東側の道路沿いに設定した試掘トレンチでも遺構は検出されなかった。そのため、2区の北側の部分も調査対象から除外した。

II区包含層出土遺物（第11図）

土師器（1～9） 1は口縁部がやや長く伸びるので、杯となるか。淡橙褐色。2は橙褐色を呈す高台付杯の高台付近の小片で、径・傾きの復元には不安がある。摩滅が顕著で高台の形態も定かでないが、底部と口縁部の境に低い高台を貼付していると思われる。3は碗の高台付近破片で、灰白褐色を呈す。4・5は皿である。4は口縁部の欠損した小片であり、径の復元には不安がある。底部外面はヘラ切り後丁寧なナデを施している。5は口径8.1cm、器高1.0cmの小皿。底部外面はナデを施している。このほかに図示することができない小片であるが、底部糸切り痕を残す小皿片も出土している。6～9は甕。6は小片で、口径、傾きは不安であるが、径23.4cmに復元される。強く口縁部を外反させて、内面にはわずかにケズリの痕跡が残る。外面黄褐色、内面白黄褐色を呈す。7は肩部から口縁部にかけての破片で、口径24.7cmに復元される。口縁部は6同様に強く屈曲させて、胴部外面ハケメ、胴部内面ケズリで仕上げる。暗黄褐色。8は口縁部小片で径・傾き不安であるが、口径25.6cm前後になるか。口縁部の屈曲は6・7より弱く、内面褐灰色、外面淡褐色を呈する。9は口径復元の困難な底部小片。屈曲は弱く、口縁端部をやや薄く仕上げるのが特



第11図 II区包含層出土土器実測図(1/3)

微的である。外面淡黄褐色、内面橙褐色を呈す。

須恵器 (10~19) 10は平底皿の口縁部と思われる。口縁部は短く直線的に伸び、底部外面はヘラケズリで仕上げるものと思われる。灰色を呈し、焼き締めが不十分である。11は口径13.6cmに復元される杯口縁部小片である。暗灰色を呈す。12・13は平底杯の底部片と思われる。12は底部外面をヘラケズリで仕上げるが、中央部にはヘラ切り痕をとどめ輪状に突出している。焼き締めが不十分で灰色を呈す。13は摩滅の進行により調整の観察が困難である。生焼けに近い状態で、白灰色を呈す。14~18は高台付杯の底部付近の破片で、いずれも小片のため径の復元は定かでない。15は他と比べ高台がやや高い。焼成がやや不良で、瓦質に近い状態となっており、内面灰色、外面暗灰色を呈す。15以外は低い高台を底部と口縁部の境界近くに貼付し、焼成は良好で灰色~暗灰色を呈す。19は甕口縁部~肩部にかけての破片である。口縁部は丸く外反し、強い横ナデによって端部中央をかすかに突出させている。胴部外面は擬格子タタキ、内面にはかすかに同心円文当具痕が残り、頸部内面は工具のあたりによる線条が所々残る。焼成良好で全体的に灰色を呈すが、口縁部外面はやや赤味をおびている。

瓦器 (20) 20は灰褐色を呈し、土師器に近い焼成であるが、形態からすれば瓦器。底部に低い断面三角形の高台を巡らしている。

以上の土器は主体が8世紀であるが、9世紀前半と思われる2、10世紀に降るとと思われる3、13世紀代と思われる20などがある。また、糸切り底土師器皿小片もあるので、一部は中世にかかるものと思われる。

IV. 下高橋十ノ江遺跡

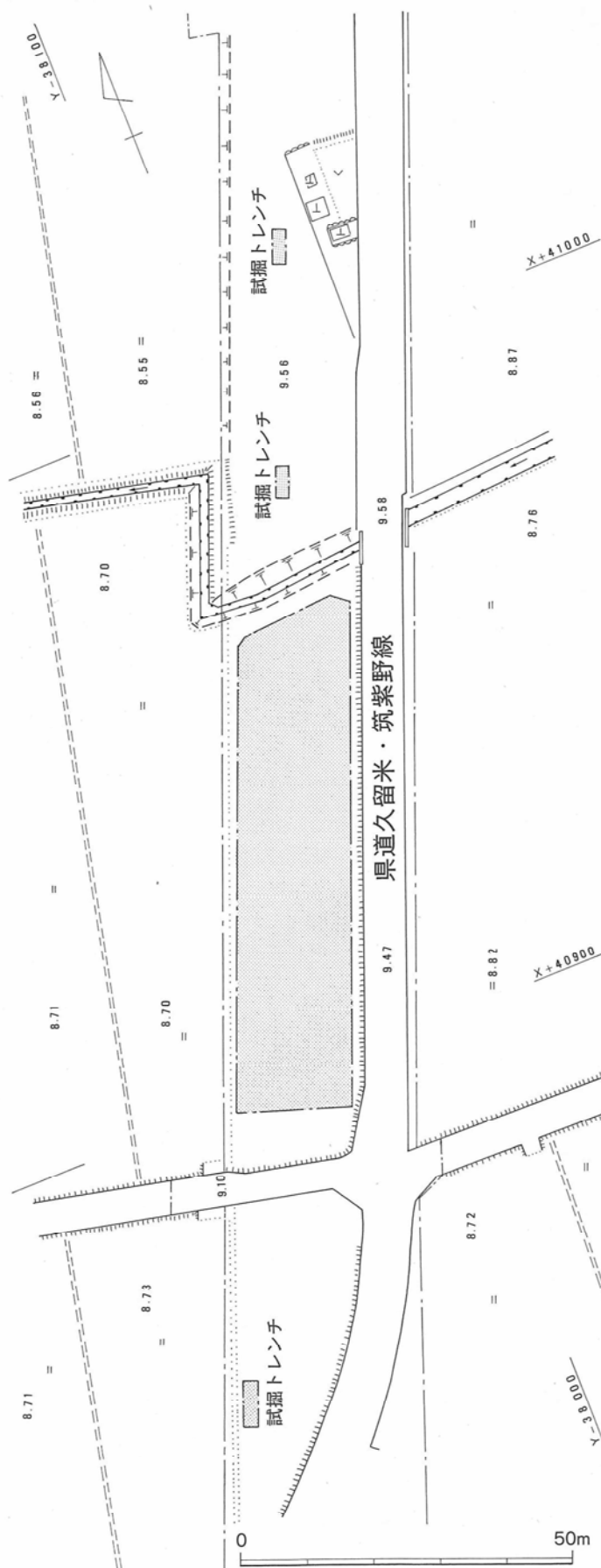
1. 遺跡の内容

調査地は、大刀洗川の西岸の低位段丘上に位置する。調査区を南北に二分して、調査を行った。

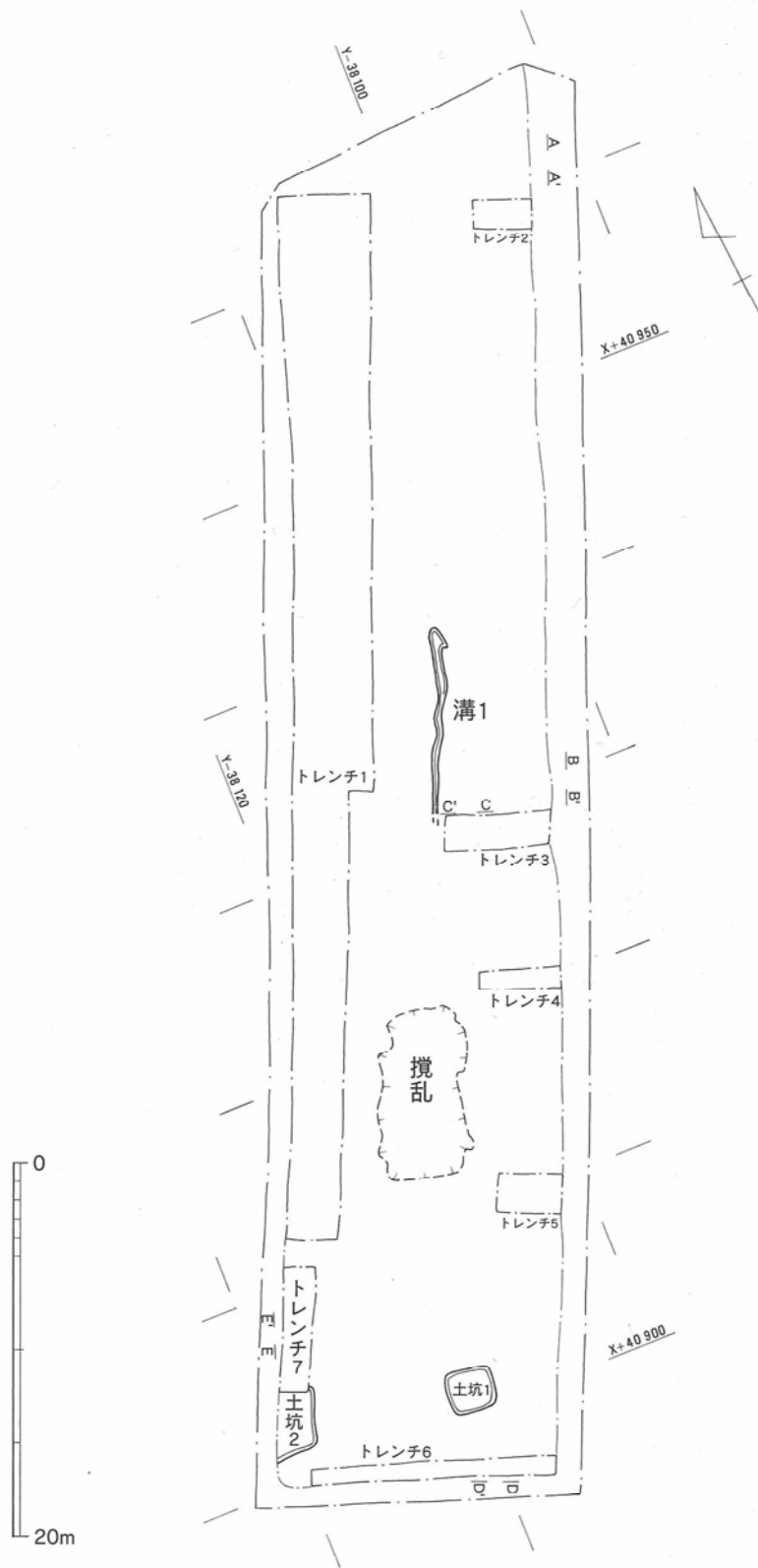
調査は北側から着手し、反転して南側を調査した。地表から試掘時の遺構検出面までが深く、また表土が粘質のひどく扱にくい土で、重機での表土剥ぎにはかなりの時間を要した。また、調査期間が梅雨であった為、幾度も水没を体験し、予想以上に時間のかかる調査となった。

当調査区は試掘時には、中世の遺物をとまなう溝とピットが検出され、本調査の運びとなったが、表土剥ぎをしたところ、古代から近世までの遺物が出土したものの、明瞭な遺構面を確認することはできなかった。

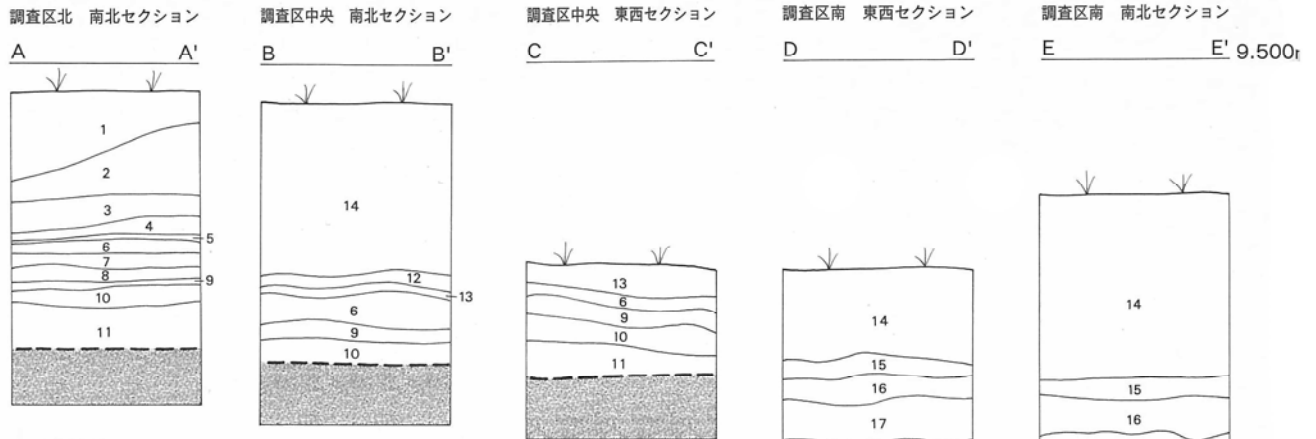
以下、トレンチの土層図を中心に遺跡の概要をみていくことにする(第13・14図)。遺物を包含する層は、北側では第6層、南調査区では第18層を中心とする。北側におけるレベルは8.500m、南側におけるレベルは、7.500mであり、南北でおよそ1mの標高差がある。当初この層を遺構面と考え広げてみたが、遺構が認められず、ごく少量の遺物を包含する層の広がりはあるものの安定しないこと、出土した土器がほとんどローリングを受けていること、まとまった遺物の出土がみられないことから、試掘で確認された、地表面より1.5mの高さまで下げてみた。この面でも遺物は確認されるものの、明確



第12図 下高橋十ノ江遺跡・周辺地形図 (1/1,000)



第13図 下高橋十ノ江遺跡遺構配置図 (1/400)



土層観察表

土層番号	土色	しまり	粘性	備考
1	10YR6/2 灰黄褐色	×	×	客土
2	10YR3/1 黒褐色	△	×	客土
3	10YR4/3 暗褐色	△	△	客土
4	10YR7/6 明黄褐色	×	×	客土
5	10YR3/1 黒褐色	○	○	
6	10YR4/2 灰黄褐色	○	○	褐色土粒を多く含む。土器片を包含する。
7	10YR4/1 褐灰色	○	○	褐色土粒を多く含む。土器片を包含する。
8	10YR4/1 褐灰色	○	○	
9	10YR3/1 黒褐色	○	○	
10	10YR4/1 褐灰色	○	○	砂を10%含む。
11	10YR3/1 黒褐色	○	○	水分が多い。
12	2.5Y4/1 黄灰色	○	○	
13	10YR4/1 褐灰色	○	○	土器片を含む。
14	10YR4/2 灰黄褐色	×	×	客土
15	10YR3/2 黒褐色	○	○	
16	10YR4/2 灰黄褐色	○	○	砂を多く含む。褐色土粒を多く含む。
17	10YR3/1 黒褐色	○	○	砂を多く含む。褐色土粒を多く含む。
18	10YR3/1 黒褐色	○	○	褐色土粒を多く含む。
19	10YR3/1 黒褐色	◎	○	遺物はなし。
20	10YR3/1 黒褐色	◎	△	
21	10YR3/1 黒褐色	◎	×	水分が多く、植物遺体を多く含む。

第14図 下高橋十ノ江遺跡土層図 (1/40)

な遺構は確認できず、氾濫原の様相を呈している。

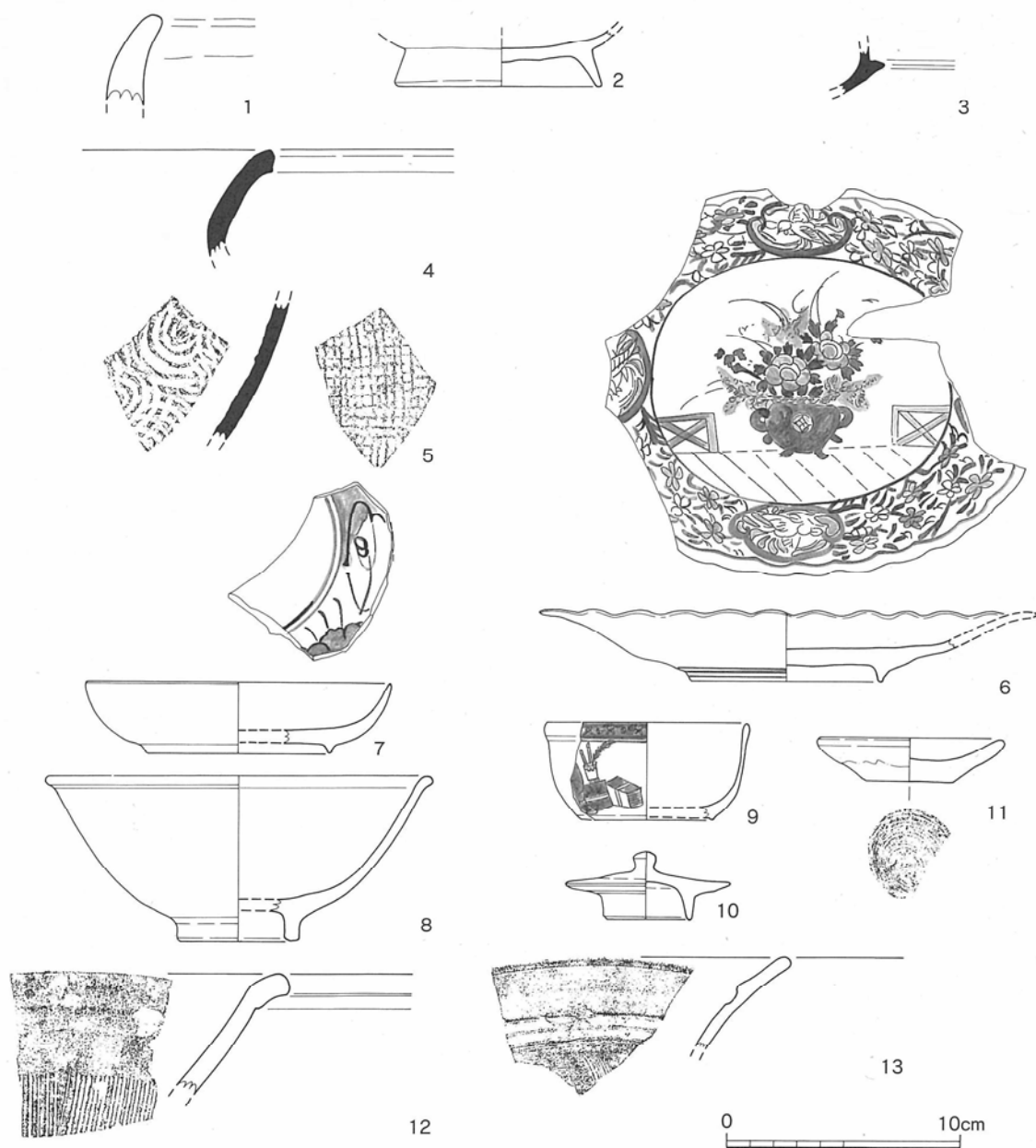
そこで、トレンチを入れて調査してみたところ、トレンチ3からは、土師器の底部が出土した。このため、トレンチ周辺も広げて確認したが、遺構は捉えられず、遺物もほとんど出土しなかった。試掘トレンチの付近では、溝が一条確認され、試掘の結果と一致する。しかし、溝は浅く、残りは良くない。また、付近にもオリーブ褐色の土の広がりがあり、一見遺構に見えるが、広範囲で広げたとこ、土は被っているだけで明確な遺構ではなかったことが判明した。調査区北半では第6層以下を掘り下げたところ、第7層まで遺物を包含する層がつづくが、第10層砂分を含む褐灰色の土になると遺物は全く出土しなくなり、第11層になると、植物遺体を多量に含む黒褐色の土層になる。この層からは水が湧くため、この層以下の調査は不可能であった。

つづけて調査区南側の調査を行った。北側とほぼ同じ性格の第18層を遺構面として検出したところ、2基の土坑が検出された。しかし土色は確かに異なるものの遺物はほとんどなく、遺構とするには躊躇する。

以上よりこの遺跡の大部分は、氾濫原に占められていた事がわかる。とはいえ古墳時代・古代および近世の遺物が確認され、付近に遺跡の存在を窺わせる。

2. 出土遺物 (図版6、第14図)

1～5は遺構面から、それ以外は遺構面上層より出土したもの。1～2は土師器で、1は甕



第15図 下高橋十ノ江遺跡出土遺物実測図 (1/3)

の口縁、端部が残る。2は高台付椀の高台である。10世紀代か。3～5は須恵器で3は坏身、6世紀後半～7世紀初め頃。4は甕の口縁、5は甕の胴部破片で外面には格子目タタキが施され、内面には青海波の工具痕がみられる。6～13は近世以降の陶磁器類であり、調査区では多く採取されたが、この中で残りの良いものを報告する。6～9は磁器、6・7の産地は肥前。6は皿、型打成形、文様は内面色絵、鳥と花卉、見込み一重圏線、外面は蝙蝠文。7は皿で、くらわんかの類。染付、文様は半菊文か、見込み二重圏線、外面唐草文。8・9は碗、8は口縁玉縁。透明釉がかかるが、内面および高台内は無釉。9は染付、顔料が鮮やか、19世紀以降。口縁は玉縁、外面に○×文、人物などの描写がみられる。10は完形の陶器の土瓶蓋。灰釉がかかる。11～13までは炝器。11は灯明皿。底部回転糸切り右回転。12と13は播鉢。内外面に釉がかかる。唐津系か。

V. おわりに

下高橋敷町遺跡の調査では、当遺跡周辺ではこれまで古墳時代の遺跡の存在が知られていなかったが、今回の調査により確認できたことが一番の成果である。

古墳時代の土坑2・3内からは、ほぼ完形に近い土器が出土し、良好なセットをなしている。遺構の時期を考えると、土坑2出土の土器4および土坑3出土の土器8（第8図）はいわゆる畿内系の甕である。口縁が外反し、器は壁が薄く、球形に近い器形を呈し、布留系の甕と考えられる。ただ共伴する土器をみると、より新しい様相を呈することから、現在は古墳時代前期の範疇と考えておきたい。

大刀洗町においてこれまで古墳時代初頭の土師器の良好なセットが出ている遺跡は、温水遺跡と本郷流川遺跡があるが、当遺跡はこの2遺跡よりもやや新しい様相を呈し、今後大刀洗町の古墳時代を考える上で重要な資料になるだろう。

また、遺跡のある場所は大刀洗川と非常に近く、土坑以外の古墳時代の遺構が確認できないことから、これらの土坑は集落から離れて作られたものと考えられる。遺跡立地を勘案すると、河岸における何らかの行為に関わるものであろう。またII区の調査成果より、西側には遺跡は展開しないことが明らかになった。このことからI区の遺構を構築した人々の居住場所は、当遺跡の南側段丘上が想定できるのではないだろうか。今後の調査を待ちたい。

古代については、明確な遺構は出土していないが、遺物の出土から付近に遺跡の存在を窺わせる。また、製塩土器が出土していることは、近接する下高橋官衛の存在に関連したものであると考えられ、古代の当地区の重要性を窺わせる。古代において河川は重要な交通手段であり、大刀洗川もその例外ではなかったと考える。

下高橋十ノ江遺跡では、明瞭な遺構は確認できなかったが、調査により古墳時代・古代の遺物が出土したことは、付近に遺跡の存在を示唆する。また、近世の陶磁器も採取・出土しており、古墳時代・古代及び近世にこの付近で人々が暮らしていたことは確かである。

なお、付近では戦国時代の高橋城の存在が知られているが、今回の調査ではそれに関連する遺構・遺物は確認できなかったことを付記しておく。

参考文献

- 小田和利 1993「大刀洗町内遺跡群」大刀洗町文化財調査報告書第3集
重藤輝行 2001「本郷流川遺跡」福岡県文化財調査報告書第165集

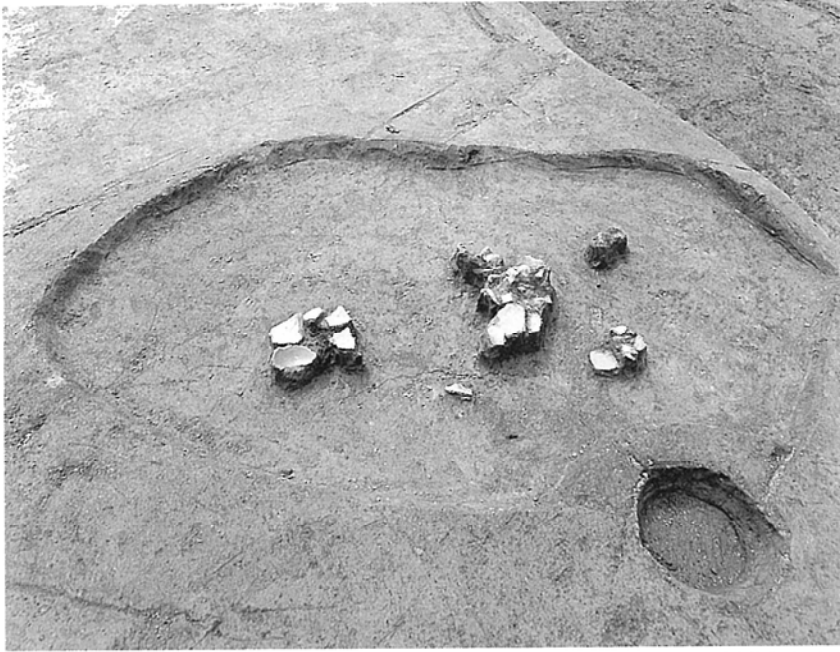
图 版



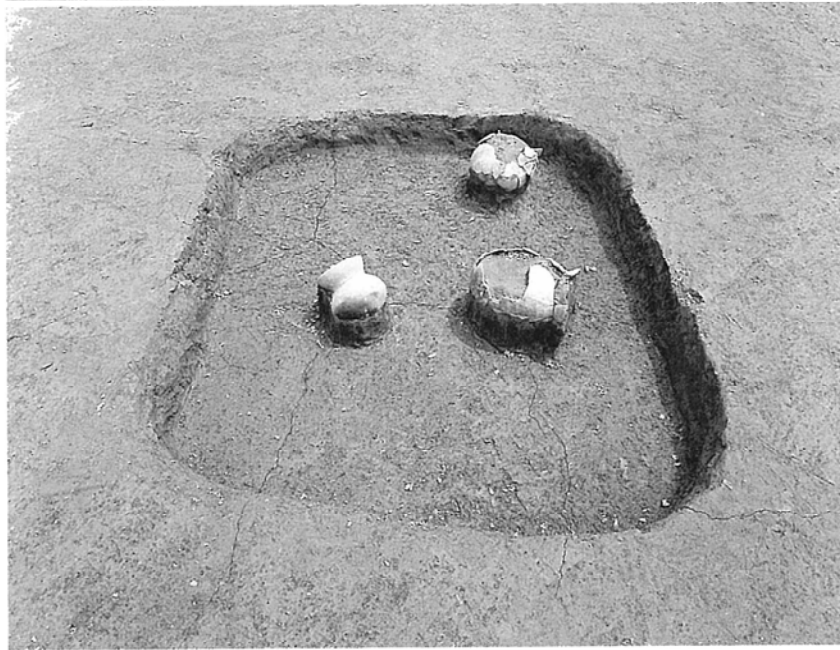
1. 下高橋敷町遺跡
I区全景空中写真
(西から)



2. 下高橋敷町遺跡
I区全景空中写真
(南から)



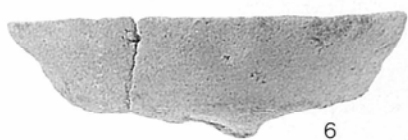
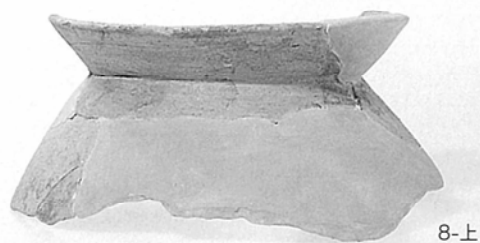
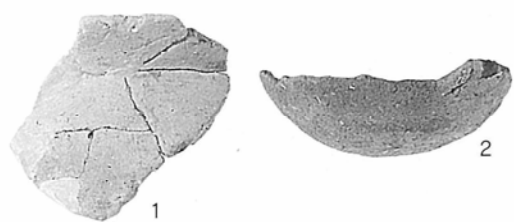
1. 1号土坑 (東から)



2. 2号土坑 (南から)



3. 3号土坑 (東から)



土坑出土の上器 (1~10)



土器5内出土の粘土塊



11



12

トレンチ・検出面出土の土器 (11~13)



13



14

製塩土器 (14)



15



16

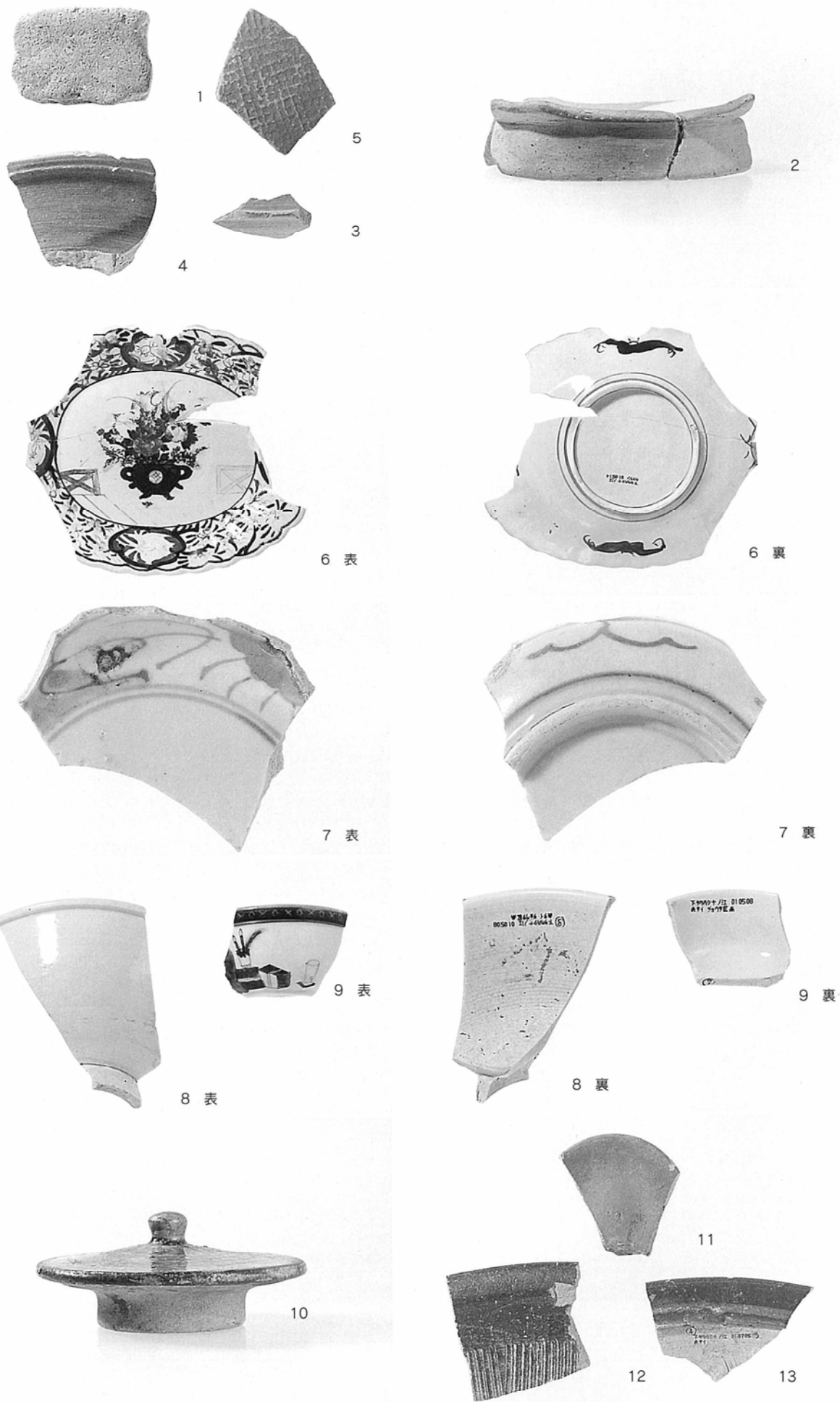
軽石 (15・16)



1. 下高橋十ノ江遺跡調査区北半 (南から)



2. 下高橋十ノ江遺跡調査区南半 (北から)



報告書抄録

ふりがな	しもたかはししまちいせき　しもたかはしじゅうのえいせき							
書名	下高橋敷町遺跡	下高橋十ノ江遺跡						
副書名	県道久留米・筑紫野線関係埋蔵文化財調査報告書11							
巻次	下巻							
シリーズ名	福岡県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第182集							
編著者名	重藤 輝行・岡寺 未幾							
編集機関	福岡県教育委員会							
所在地	☎812-8575 福岡県福岡市博多区東公園7番7号 ☎092(651)1111							
発行年月日	西暦2003年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 (日本測地系)	東経 (日本測地系)	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
下高橋敷町 遺跡	福岡県三井郡大井町大字下高橋 1265-1、1264-1	40503	650066	33° 22' 58"	130° 35' 28"	2001年5月8日 ～ 2001年7月13日 2001年9月 5～11日	680㎡	県道久留米・筑紫野線 改良工事
下高橋十ノ江 遺跡	福岡県三井郡大井町大字下高橋 734、735	40503	650067	33° 22' 12"	130° 35' 33"	2001年5月8日 ～ 2001年7月13日	1,280㎡	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
下高橋敷町 遺跡		古墳時代	土坑3基		須恵器・土師器・軽石			
		古代	溝4条					
下高橋十ノ江 遺跡		古代 近世			土器・陶磁器			

福岡県行政資料

分類番号	所属コード
JH	2114107
登録年度	登録番号
14	11

福岡県文化財調査報告書第182集（下巻）

下高橋敷町遺跡
下高橋十ノ江遺跡

平成15年3月31日

発行 福岡県教育委員会
〒812-8575
福岡市博多区東公園7番7号
印刷 株式会社 三光
〒812-0015
福岡市博多区山王1丁目14-4